

八幡の森

伊藤左千夫

青空文庫

市川の宿も通り越し、これから八幡やわたという所、天竺てんじく木綿もめんの大きな国旗二つを往来の上に交こう授じゆして、その中央ちゆうさうに祝凱がいせい旋せんと大書おほした更紗さらさの額がが掛かつてゐる、それをくぐると右側の層屋もはやの家では、最早もはやあかりがついて障子しょうじがぼんやり赤い、その隣りでは表の障子一枚あけてあるので座敷ざしきに釣つつてあるランプがキラリと光を放はなつてゐる、ほのくらい往来には、旅の人でなく、土地ちのものらしい男おとこや婆ばあさんやがのつそりのつそりあるいてゐる、赤児あかごをおぶつた児こ供ごやおぶわなのや、うようよ檼まきべい屏へいの蔭かげに遊あそんでゐる、荒物店あらいものみせの前まへでは、荷馬車かまぐるま一台荷車かまぐるま一台と人が二三人居おつて何か荷物にものを薄暗はくあんい家うちの中なかへ運はこんでゐる、空そらにも星ほしが一つ見えだした、八幡やわたの森もりにも火ひが点つじた すべて寛ゆるやかな落着おちいた光景ひかりづかひ、間まもなく鳥居とりいの前まへへくる。

鳥居とりいが薄白うすしろく見える、能よく見ると少し光ひかりつてゐる、トタンで包つつんだ鳥居とりいは西焼にしやきけのあかりを受けて、かすかに光ひかりるのであつた、左ひだりへ鳥居とりいを這は入いると、鳥居とりいについた左手ひだりてに、層屋もはやの小さな飲食店おんじきみせがある、前まへに葦あし簾すだれが立たててあつて中の半分なみだは見みえない、今カいまンテランテラに火ひをつけて軒のきぐち口ぐちに吊ぶつた所ところで、油煙ゆえんがぼつぼと立たつ 低ひかい茅かやの軒のきへ火ひがつきやしないかと思おもわれる、卵たまごや煮肴にぎかなやいろいろの食物じきが、各大小相当おほいさあひらの皿わしに盛のられて雑然ざつぜん並ならべてある、

それでも中央の前の柱のカンテラの下には、掛花生かけはないけに菊の花がさしてある、婆さんらしいのが表へ尻を向けて仕事をしている。家の中ではランプが今一ひとはり張ついた、これが八幡やわた神社の入口である。

二人は社に向つてゆく、空は未だ全く暗くなつてはしまわぬ、右手の農家の前では筒袖をきて手拭を冠かぶつた男が藁しべなどを掃いている、左手の何か大きい四角の石で女らしいのが頻りに藁を打つて居る、夜なべに縄をなうか、草履ぞうりでもつくるのであろう。

それから先は両側の松林が幹を差替さしかわす許ばかりに遠くつづいて石畳の路を掩おほうている、奥にはほんのり暗くて何のあるのも判らない、ただ敷石の道が白く長く帯を延のほした様に奥深く通じて居るのが見える許ばかりである、予等二人が十五六間も進んで這入はいつてゆくと漸ようやく前面にぼんやり萱葺かやぶきの門が見えだした。

先年桃林の花を見に来た時此門前このに一人の婆さんが茶を売つて居おつたことを思い出す、近ちかづいて見れば無論婆さんは居ない、茶店のあつたらしい所には石が三つ四つ並んで居る、見たところ今でもあの婆さんが出るのかどうかは知らないが、兎とに角日中かくは茶店がある様子だ、左右の矢大臣もそれと許ばかりりほのかに佛おもかけが見える、門を這入はいる、木の葉が石の上にひたに散つてあるのが下駄にさわる、がさがさする音が耳立みみたつて聞える、二人は無言で進む

静しずかなことはこおろぎも鳴かぬ。

正面に社殿が黒くぼつと見えて来た、前に張られた七五三飾かざりが、繩は見えないで、御幣ごへいの紙だけ白く並んで下さがつて居るのが見える、社殿の後は木立が低いので空があらわれた、左右の松木立の隙間にあらわれた空の色が面白い、薄い茶色に少しく紫を含んだ、極めて感じのよい色である、油絵にもこういふ色は未いまだ見ない、西洋の写真にこういふ色を見ることがある、西焼のあかりが未いまだ空全体に映っているのである、松林にまじっている冬木が幾分の落葉を残してほんのりとした梢の趣がその空の色と調和がよい、油絵が出来たらなアと思う、空の色がよいなと思つた眼を稍やや下へ見下げると、社殿の右手の木立が西あかりを受けてかあたりが一体にあかるい、そのあかるいのに何となし光がある様に思われる、不折君の所いわる謂い繪具の光ということなど思ひだす、あたり一面に色ある落葉が散つている、がさがさ落葉を踏ふみちらして進む、拝殿の柱に張つた七五三と思つたは、社殿二間けんほど前に両側にある松に張つてあるのであつた、松の根にある唐獅子はただ黒ずんで見える許ほかり目も鼻も判らぬ、台石に点々色がある、落葉かと思つて眼を寄せて見れば黒ボクの石の隅々をついだシツクイであつた、二人社前に正立し帽を脱て黙拜した後右手へ廻まわる。先に西あかりを受けた木立の色と思つたは、非常に大きい银杏である、丈はそれ程でない

が、幾百本とも判らぬ幹が総立に一纏りまとまになつて居るから、全周囲は二三丈じゆうもあるであらう、思えば先年参詣の時門前の婆さんが千本銀杏と申しますと云われたのであつた、落葉は未だ三分の一にも達しない、光る許ばかりの黄葉もみじを薄暗い空気でつつんだ趣き、あかるいようでも物の判らぬ夢のような感じだ、いやどうしても適當の形容語が出来ない、その銀杏の蔭に立つて居ると、黄色い空気の中に這入はいつて居る感じで、そうして、それが薄暗い夜の感じで何とも云えないよい感じである、ステッキで枝を打つとばらばら葉が落ちる、非常に静しずかであるから帽子に落つる音が聞える、その音が夢で聞くような感じのする音である、暫く遊しばらんでいて見たかつたが、時刻が時刻故ゆえそうもいかないで裏を一週して、西手の白壁がある板倉の脇へ出る、社に板倉は不調和の感じがした。

二人は帰る方向になつて西を向くと、西焼けの残光が未だ消え切らないで、木々の隙間から地平線に明るい、今まで暗いと思つた松林の根もとがはつきりと見えた、神樂堂の上には背の高くくねつた松が空に自分の影を摸様の如くに押して居るのが一寸ちよつと面白い、直ぐに出しまて了うのは如何いかにも惜しいような気がして、屢しばしば々銀杏を振り返り、あたりの趣を眺めつつ、偶然の思いつきで、趣味深い時刻に來た仕合しあわせを語り合いつつ出る。

不知八幡森しらずわたのもりも予は幾度か見て居るが、つれの人は始めてであるから、一寸ちよつと立寄つたけ

れど、もう暗くなって石牌の文字も判らない、森というは名許なばかりで今は全く竹藪に変わっている、竹藪の中は闇々として暗いばかり空は青ざるばかりに澄んで、そよとも動かぬ大竹藪の上には二三十の星ひやかが冷ひやかに光って居た。

明治39年1月『馬酔木』

署名

左千夫

青空文庫情報

底本：「左千夫全集 第二卷」岩波書店

1976（昭和51）年11月25日発行

底本の親本：「馬酔木 第三卷第一號」根岸短歌会

1906（明治39）年1月1日

初出：「馬酔木 第三卷第一號」根岸短歌会

1906（明治39）年1月1日

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

「其」は「その」に、「只」は「ただ」に、置き換えました。

※読みにくい言葉、読み誤りやすい言葉には、振り仮名を付しました。底本は振り仮名が付されていません。

※「許」と「許り」と「ばかり」の混在は、底本通りです。

※初出時の署名は「左千夫」です。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八幡の森

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>